



削り出すハマグリ碁石

年間50万個以上

ミツイシ 工場長

那須 記男さん(61)

曲面の美 カギは砥石の磨き加減

白い碁石で最高級とされる、ハマグリ(ハマグリ)の殻からつくる碁石。宮崎県日向市はその一大産地だ。地元産のハマグリが減り、今はメキシコ産が主だが、ハマグリから碁石を削り出す「世界唯一」の技術が今も根づく。

老舗メーカーの黒木碁石店(現ミツイシ)で約30年、碁石づくりの腕を磨いてきた。貝焼きのような匂いが漂う工場。カゴに山積みになっているのは、円筒形にくりぬいた錠剤のようなハマグリ(ハマグリ)の白い殻。この塊を片面ずつ碁石の形に削る「中摺り」を担う。品質に直結する最重要の工程だ。

金具に塊をはめ込み、モーターで高速回転する砥石に片面を押し当てる。

「シュッ、シュー」

小気味いい高音が響くと、「錠剤」がなめらかな碁石に姿を変えた。この間3秒ほど。すぐ次の塊を金具にとりつけ、黙々と作業を繰り返す。「リズムを一定にするのが大事。疲れず正確に作業ができるんです」

年間で削り出す碁石の数は50万個を超える。美しい曲面と、速さを両立する技術は日向でもトップレベルだ。

ハマグリ(ハマグリ)の碁石は、高級品なら黒石とセットで70万円以上。価値を左右するのは石の厚みだ。25の等級があり、厚みが0.6mm増すと、万円単位で値が上がることも。貝の表のしま模様をどれだけ美しく残せるかも重要だ。最低限の切削で正確に形を整えていく。

決め手は砥石を微調整する技術だ。砥石の表面は碁石の曲面を出すために丸くへこんでいるが、そのへこみに刃のついた道具をあて、碁石の大きさに

合わせて形を整える。

作業が続くうちに砥石は形を変え、切れ味も落ちるため、1時間ごとに磨かなければならない。今は数分~1時間あれば磨けるが、最初は一日かけても満足にできなかった。

中摺りを初めて任された30代半ばのころ。砥石を万全に調整したつもりでも、削った碁石を先輩に見せると「ゆがみがあるな」と指摘された。30分探してもわからない。「本当にあるんですか」。食い下がると、鉛筆で印をつけてくれた。そこに、曲面にわずかに影ができる程度のふくらみがあった。

「とにかく悔しくて、一人前になりたかった」。形の基準になる「マスターストーン」という石と、削った碁石を何時間も見比べたこともある。

かつての日向市は碁石の生産が今より盛んで、最初は給料の良さにひかれて入社した。囲碁人口が減り、国内の碁石市場は1980年代をピークに縮小。十数人いた同僚の職人も3人に減ったが、近年は中国や米国などからの需要が増え、工場もフル生産が続く。

「不器用だけど、機械と一対一でコツコツ作業するのは、性に合ったかな」と振り返る。碁石の仕上げを担う同僚の河津かずよさん(68)は、「とにかく納得いくまで、形にこだわっていた。その姿勢が今に生きている」。

工場長として後進を育てる今も、自分の作業すべてに満足はしていない。砥石の調整がびたりとはまると、趣味の民謡をつい口ずさむ。「毎日鼻歌が出ればいいんだけど、まだまだ」。理想を追う日々は続く。(高橋尚之)



碁石の形を目で見極めながら、1日7時間半、黙々と作業を進める。「碁石の理想の形は、すべて頭に入っています」=宮崎県日向市、金子淳撮影

受け継がれる道具

凄腕のひみつ

砥石を磨く「ドレッサー」という道具は、先端の円形の刃がベアリングで滑らかに回り、均一に磨ける。20年以上前に先輩たちが考案し、受け継いできた工場のオリジナルだ。



民謡歌い心すっきり

入社間もないころ、いまの社長の母親に誘われて民謡を習い始めた。当時はほんの付き合い程度のつもりだったが、「時代が変わっても色あせない奥深さ」にとりつかれた。今や日本武道館での全国大会にも出場する腕前に。週2日、地元の民謡教室で講師もつとめる。「腹の底から声を出すと、とにかく気持ちすっきりしますね」

プロフィール

なす・のりお 宮崎県椎葉村出身。定時制高校に通いながら自動車修理の仕事続け、22歳で黒木碁石店に入社。囲碁のルールは入社時に覚えたが、「時間がかかるのでほとんど打ちませんねえ」。